

死刑囚・岡下香歌集

『終わりの始まり』から



光本恵子 (歌人・未来山脈主宰)

歌集出版から二年目の平成 20 年 4 月 10 日 9 時 54 分、岡下香(おかした・かおる)死刑囚の刑が執行された。絞首刑であった。

夢を見て 今日という日に行き止まり
開ける怖さよ 未来山脈の扉

幸せという字の中に辛いと言う字が
隠れていていつも意地悪する

天国より舞い降りた桜はうすむらさき色
誰がゆすぶった

ようやく気づいた反省と償いの違い
償いは命を差し出したときに叶う

そっと祈ってみる 語りたくない過去の
魂までがほぐれていく

歌集、岡下香『終わりの始まり』(未来山脈発行)を発売したのが、2006年(平成18年)12月、以上の歌はその歌集の中のものである。

「あの事件は残虐だったんですよ、長く逃亡していたのでずっと追いかけてました」と事件記者の電話。「被害者のことを考えると、死刑囚の歌集なんか、よく出せたねえ」と名を告げない男から。「死刑はぜったい反対です。あのような人の歌集を良く出してくださいました。御礼を言います」と修道女。「献体をする方法がありますのでお教えします」と医師から。「わしも独房に居たのですが、、、」と刑務所の中の話をする人など。死刑囚・岡下香歌集『終わりの始まり』の出版後の反響で、しばらくは我が家の電話が鳴りっぱなしの状

況であった。

死刑囚の短歌はこれまでに昭和 42 年に出版された島秋人の『遺愛集』(毎日新聞で窪田空穂指導による)を知るだけで、それまで死刑囚という名を聞いただけで「おぞましさ」を感じていた。そんなわたしが、あるきっかけで死刑囚である岡下香を知り、謙虚な手紙を受け取ったときから、霧が晴れるように、その偏見はすっと消えた。さらに短歌を読み、手紙をやり取りする中で、人の情に泣き笑う同じ人間なのだと、その当たり前のことに気づいたのである。

平成 16 年 8 月のある日、拘置所から一通の手紙が届いた。拘置所の中で「未来山脈」誌に触れ、自分の立場は死刑囚であるが、そんな者でも会員になって短歌を詠むことが出来るかとある。口語で自由律の雑誌であること、また歌誌のロゴとリズムに惹かれたと、几帳面な小さな字で薄いレポート用紙にびっしり記されていた。

わたしは拘置所からの便りに何事かと落ち着きを失い少し興奮した。が、大きく息を吸い込めだ。殺人犯を理解する気持ちを持ち合わせていない。まして同情などなかった。

「短歌を詠みたい意思」だけが脳裡に大きく渦巻いた。わたしはおもむろに返事を書く。

短歌を詠みたい意思があれば、どんな身分や立場の人も短歌は詠むことができる。

生死の際に居るときほど、言葉は研ぎ澄まされ、活字への信頼は強いことを体験で知っていた。二十代の末に敗血症に癌を病み 5 年の闘病の末このままでは死ねないとの思いが、今日のわたしの短歌活動につながるから。

人の生命はせいぜい 90 年、活字は、短歌は、限られた人の命よりも幾倍も長いのである、と。その日を境に岡下から、言葉がこぼれるように毎月届く短歌が、わたしの胸をドスンと突くようになっていく。その原稿には刑務所の検閲の印鑑が付かっていた。

壁の汚れはペンキでも塗り消せるけど
罪の跡だけまた浮かんでくる

涙で消えない罪だから太陽の光で清め
たい その太陽が拝めない

短歌が送られてきて半年が経過したころ、
「近く判決が下され確定囚となるかもしれない、
そうなると、親族以外にはもう会えない」
との連絡。

平成 17 年 1 月 12 日、冬の割には暖かな朝
である。わたしは取るものもとらず、中央線・
信州下諏訪駅から特急「あずさ」に乗り、
新宿から秋葉原で乗り換え、荒川を超えて
東京拘置所のある小菅の駅に降り立った。

冷たいコンクリートの駅そのものが拘置所
を思わせ、ぞくぞくしてきた。駅からすぐ右
を右折し、赤いレンガの塀に沿ってぐるりと
歩き、ずんずん行くとわずか 10 分ほどで面会
所の門。

日本で最大規模の東京拘置所。思ったほど
のいかめしさはない。面会所には、黒いスー
ツを着た大きな男の人や子供連れの女性に交
じって、国籍不明な厚化粧の女性が三人の黒
眼鏡の青年を従えて煙草を吸っていた。この
日はすでに面会人がいたので断られた。次の
日に出なおすことにして拘置所の近くにホテ
ルを取る。

岡下から短歌が届くようになって夏から冬
へと経過していた。死刑囚であることは知ら
されていたが、どのような犯罪を犯し、今日
に至っているのか、その仔細を知りたいとは思
わなかった。知る必要もなかった。その短歌
は常人の想像を超える監獄という小さな空間
で、明日の命も知れない生死の極みで詠ま
れたと言うだけで充分意味があった。短歌は
人の心の叫びや真実の声、悲しみを端的に表
現する。その人の歌は気持ちの優しいこまや
かな短歌で、その境遇を想像するだけで心打
たれた。

今日はどうしても岡下香に会うのだとホテ

ルを 8 時に出る。正月 13 日、朝一番に再び東
京拘置所に足を踏み入れた。

空港の身体検査のようなところを潜り抜け、
円形になった長い廊下を行き、エレベーター
で 8 階。ようやく指定された場に着いた。そ
こでも受付を済ませソファで待つこと 10 分。
指定の部屋のノブを廻すと 6 畳ほどのなんの
飾りもない部屋。半分、ガラスで仕切られて
いる。妙な静けさ。座って待つとその空気を
破るように向かいのドアが開き、浅黒くがっ
ちりした中背の人がにこやかに笑んでいる。

「はじめまして、遠いところからわざわざ
来ていただきありがとうございます」

穏やかに切り出されたことば。それまでの
緊張がふわっと真っ白になって解けていく。

「岡下さんのふるさとは三次なんですね」。
彼のふるさと、広島三次市はわたしの故郷・
鳥取県の米子市に近い。話しているうちに、
まるで幼な友達に会ったような不思議な懐
かしさが湧く。脳裡に歌で知った彼の身近
を浮かべ家族の話、孫の話になった。

「そろそろ、、、」横で筆記している看守の言
葉で、ここは刑務所の面会室なんだ、と再認
識するほど。許された時間はわずか 20 分。努
めて明るく振舞い終始にこやかに語る彼の表
情は痛いほどの配慮であった。

それから二ヶ月後、彼は確定囚となって、
親族以外には会うことが叶わなくなった。そ
の後には内妻から正妻となった女性を通して短
歌が発信され、わたしの添削は続いた。

ある日こつこつ靴の音が独房の前で突然止
まり、それが執行の日だという。毎日その恐
怖の中で精神を安定に保つということ。星が
見えるのも一年に数回の狭い独房を思って、
死刑囚の立場のやるせなさに、精神的な安ら
ぎはないものか。わたしは一冊の聖書を贈る
ことにした。

獄舎にもあるささやかな幸せ

米粒ほどの蜘蛛が顔を見せたとき

古里の三次 山河の恵みと人情を
忘れはしないがもう戻れない

次第に彼の歌に変化が見られるようになる。嘆きの短歌から、こんな身でも世の役に立てるだろうか。という思いに変わった。それまでは上告して少しでも罪が軽くなるようにとの考えが、このまま天国に召され犯した罪を償いたい。こんな身でも何か世の中に出ることがあるだろうか、と。「私自身が亡き者となった後、献体したいがどのような手続きをしたらよいか」と質問がくる。妻という女性に会って方法を探ったが、親族数人の内諾を得なければならぬと判り暗礁に乗り上げた。彼の罪への贖罪の気持ちを考えると、わたしにできることは何であろうか。思い立ったのは「歌集をだしましょう」であった。実現すれば夢のようだと言下は喜ぶ。

いつ死刑執行されるかわからない身で、ともかく一日でも未来に目標を持って生きてほしい。わたしの思いは日々安らかであってほしい。それだけを願う。「死の向こうにも光があると信じる」ことであった。

世間の風当たりを予想し、何よりわたし自身の覚悟が必要であった。せめてゲラだけでも見て、執行の日となりますようにと祈る思いで、彼の誕生日、12月14日を発行日と決め、題は聖書から『終わりの始まり』と再生の願いを込めたのであった。

歌集出版から二年目の平成20年4月10日9時54分、岡下香死刑囚の死刑が執行された。

殺人も差別もない天国で、岡下は安らかな心地で、汚濁にまみれたこの世を見ているのかもしれない。

それから三日目、4月13日、岡下から、以前に認めたらしい覚悟の遺言状が届いた。

「遺・メッセージ最後の御便りです。

光本恵子先生 お別れのときがやってきました。

思えば、自分自身がコントロールできず、

迷い多い生活をする中で、光本先生に巡り合えて短歌の心を学び、詠みつつける中で、不思議と心の落ち着き、自分の心の汚れがどんどん浄化されて、自死という人の世の禁じ手を冒すことなく、現世での償いをするための大きな力を頂きました。

短歌にのめりこむことで、自分の本音の部分を吐き出すことができ、みずからを裁くことができる自分を取り戻し、償いの日々を送ることができました。

償いの心の証として歌集『終わりの始まり』を遺すことができました。その事が嬉しいです。それについては光本先生の温情なくしては成し得ぬことでした。また歌友の皆様のご厚情を忘れるものではありません。感謝の心でいっぱいです。

先生はじめ未来山脈の皆様、他結社にあっても短歌を愛するすべての皆様のご発展をお祈り申し上げます。

話したいことが沢山あるのですが、感極まり話さきれません。遠からず最後の儀式を迎えることとなります。(光本註・平成20年1月1日彼は執行の日を予想して、この日から次々に歌仲間へ遺言を書き始めたようだ)

最後に、私の死は万人の死とは違い、決して悲しくはありません。きれいな心を取り戻し、償いのため、未来へと旅立つのです。そのことを喜び、光本先生、私の命日を祝ってください。

先生に出会えてよかった。きれいな心で人生を締めくくる事ができます。いつも甘えてばかりでした。こぼれるほどの愛をありがとうございました。感謝の心をお伝えしてお別れです。

これから安眠の世界に旅立ちます。おやすみなさい。

平成20年1月1日 岡下 香 書

光本恵子先生 江」

(仮称・諏訪クラブ

2011年7月設立準備例会卓話)